

天女とお化け

小川未明

青空文庫

天職てんしよくを自覚じかくせず、また、それにたいする責任せきにんを感じかんず、上うえのものは、下したのものに好悪こうおの感情かんじようを露骨ろこつにあらわして平気へいきだった、いまよりは、もつと暗くらかった時代じだいの話はなしであります。

あたあたらち中ちゆう学がくの受うけ持もち教き師ようしとなつたSは、おけ屋やのむす新あたらしく中ちゆう学がくの受うけ持もち教き師ようしとなつたSは、おけ屋やのむすこの秀吉ひできちを、どういふものか好きすであります。特別とくべつにきらつた理由りゆうの一つは、ほかの生徒せいとのごとく学が科かができないからというのではなく、秀吉ひできちがいつも、じつと教き師ようしの顔かおを見みつ

めて、なにか恨みをもつように、あるいは相手の心の内をさぐるように、ゆだんのできぬ、いらだたしい感じを、与えるからでありました。

秀吉は、教室へ入ると、目をたえず教師の顔にとめて、ほかへ動かさそうとしました。

「いったい、なんのため、こう自分ばかり見ているのだろう。」と、教師は、不快に思いました。で、つい彼にばかり質問する気になったが、なにをきいても、秀吉の答えは、ちんぷんかんでありました。それというのも、よく話を聞いているのではなく、ほかのことを考えているか、また、心の中で、だれにも想像のつかぬようなことを、思っていたからでした。

これは、算数のときでも、作文のときでも、同じでありました。こうした子供は、不思議に図画だけは、じょうずに書くものだといわれていたが、秀吉のばあいは、静物を写生させても、なにをかいたのか、その外形すら、まとまっていなかったのでした。

「これは、手のつけようのない低能児だな。」と、教師は、口の内でつぶやきました。

ついに、秀吉の母親が、学校へ呼び出されました。彼のすんでいる部落は、貧しい人々の集まりでもありました。母親は、おそろおそろ職員室へ出頭して、ひくく頭をたれて、いかめしい、ひげのある顔を、まともに見ようとせず、た

だ教師きょうしのいうことを、額ひたいに汗あせをにじませながら聞きいていました。

「あの子こは、妙みょうなくせがあつて、人ひとの顔かおばかり見みていて、勉べんきよ

強うがすこしも頭あたまに入はいっていないが、家うちではどんなふうですか。」

と、教師きょうしは、たずねました。

「先生せんせいのおつしやることを、よく聞きいて、頭あたまに入はいれなければな

らぬと、家うちではいいきかせているのですが。」と、母は親おやは、恐き

縮ようしゆくしました。

「いや、人ひとの顔かおを見みるのが、あの子このくせであるか、聞きいている

のです。」と、教師きょうしは、自じ分ぶんにだけする行こう為いなのか、それを知し

りたかつたのです。

「あの子こだけは、なにを考かんえているか、私わたしどもにも、わからな

ことがあります。ほかの子には、そんなこともありませんが、よく、ねこと遊んでいて、おかあさん、このねこはどんなことを、
 思っているでしょうかねと、聞くのであります。それは、おかあ
 さんにも、ねこの心の中はわからないよ、ねこに聞いてみなければ
 ねえという、あの子は、ちよつと見ると、ずるそうだけれど、
 また、むじやきだから、ねこは、かわいがられるんだねといつて、
 いつまでも、ねこを見ているのでございます。」と、母親は答
 えました。

この話を聞くと、教師は、だんだん、秀吉に顔を見られる
 のを、気味悪く思いました。どうかして、あの子供を、学校へ
 よこさないようにする工夫は、ないものかと考えました。

「おかあさんに聞きますが、あの子は、小さいとき、脳膜炎を
わづらったことがありませんか。」と、教師はたずねたのです。
母親は、自分の子供が、白痴でないかと、いわれていると気が
がついたので、

「そんな覚えも、ございませんが。」と、さすがに言葉をに
ごして
いました。

「あれで、なかなか人の気持ちや、腹にかくしているようなこと
を、よく当てる妙なところがあります。」と、彼女は、最後に、
その特長をいって、子供を弁護しました。

「それで、おかあさんから、いつてください。学校にきても、
勉強にまったく興味がないくらいなら、そして、先生の

顔ばかり見ているようでは、なんの益にもならないことだから、
 いつそ学校をやめて、奉公にいくなり、家庭で、手に職をお
 ぼえるほうが将来のためにも役立つだろうと、いいきかせて
 ください。」と教師は、こういうのこすと、急に席を立つて出
 ていきました。

あわれな母親は、学校の門をでると、教師から受けた、
 ひややかな感じに、学校をいやがるのも、子供ばかりを責める
 わけにはいかぬと、ふかく考えながら、家路を急いだのでした。
 村と町の間に、一軒の医院があります。村人にいわせると、
 この医者いしやくすりの薬は高いから、めつたに、かかれぬ。だから、どこ
 でも買かいで、まにあわせるといいうわさをしました。その医院

のむすこのKと、秀吉は同級だったので、よく同じ道を話しながら、歩いて帰ることがありました。

ある日秀吉は、Kにいわれるまま、彼の家へ遊びによつたのでした。学校でもKは、よくできるという評判でした。教師もKにたいしては、秀吉とは反対で、彼を見る目つきは、いつも柔和であり、ときには、こびるように、やさしい言葉をかけるとさえ思われることもありました。秀吉はKについて、よくふき清められた玄関を入ると、ひやりとした空気を感ぜました。

かたわらには患者の控え室があつて、そこをぬけると、薬品のにおいのする診察室があり、並んで座敷になつていまし

た。秀吉は、Kの客という資格で、案内されるまま、奥にあるKの書齋へみちびかれました。その際、座敷のうすぐらい床の間においてあつた、美しい尾をひろげた大きな鳥に、目をうばわれたのであります。

「君、あの鳥は、なんとというのかい。」と、秀吉は、友だちの机のそばにすわると、すぐたずねました。

「あの鳥を、まだ知らないの。孔雀の剥製なんだよ。」と、Kは答えました。

「ほんとうに、きれいな鳥だね。どこにすんでいるのだろうね。」
 「なんでも、南洋の暑い国にいますというよ。」

「どうやって、捕らえるのだろうね。」と、彼は、それから、そ

れへと、空想くうそうしてききました。

「しかし君きみ、あの尾おのいちばんきれいなところが、大毒たいどくなんだというよ。」と、Kケーは、秀吉ひできちにいいました。

「あの紫むらさきいろ色いろにぴかぴか光ひかるところなの。」と秀吉ひできちは、思おもわず目めをかがやかしたのです。

「ああ、そういう話はなしだよ。」

「なめれば死ぬしかしらん。」と、秀吉ひできちは、いいました。

「それは、死ぬしだろう。しかし、もう置物おきものにされて古いふるのだから、あてにならないが、それより、もつとおそろしい毒薬どくやくを見たことがあるよ。ただ見たみただけでは、つまらん白しろい粉こなさ。一グラムグラムの、いく百分ぶんの一いちでも、それをなめると、獣けものでも、人間にんげんでも、

死ぬのだから。」と、Kケイがいました。

「そんな、おそろしい薬くすり、ぼく見たいものだな。」と、秀吉ひできちは、ため息いきをつきました。

「家うちにあるけれど、お父とうさんが、子供こどもなんかの、見るものではないと、厳重げんじゆうに戸とだなにしまつてあるんだよ。」と、友ともだちは答こたえました。

「このあいだ、学がっこう校へおかあさんが呼よばれて、僕ぼくが小ちいさいときのうまくえんに、脳膜炎のうまくえんをやつたのではないかと、聞きいたそうだよ。」と、彼かれが正直しょうじきに、Kケイにつげると、Kケイは向むきなおつて、

「あのはげ頭あたまがかい。なんで、敏感びんかんな君きみが、ばかなもんか。はげ頭あたまこそ、大酒おおざけのみの酒しゅらん乱らんなんだよ。よくP T Aピーティーエーの会かい

員の家で、へべれけになるんだそうだ。」と、いって、Kは笑
 いました。秀吉の帰るとき、Kは玄関まで送つて出ながら、
 薬室の前をいきかけて、

「君、あすここに、どくろのしるしのついた戸だながあるだろう。
 さつきいった毒薬のびんが、あの中に、はいつているのだよ。」
 と、指さしました。

秀吉は、灰色のどくろの画に、なにか特別の胸にせまる
 鋭いものを感じました。

ちようど、そのころのことでした。町へささやかな教会堂
 がたてられました。近くの子供たちや、めぐまれない家庭の女た
 ちが、日曜日ごとに、お祈りに集まって、牧師のお説教を

きいたのであります。

牧師ぼくしというのは、女おんなの外国がいこくじん人でありました。その下したに、日にっぽ本人んじんの信者しんじやがいて、いろいろの世話せわをしたり、なにかと教きよう会かいのめんどうをみながら働はたらいていました。一人ひとりの青年せいねんは、髪かみのちぢれた、やせ姿すがたの芸術家げいじゆつからしく、もう一人ひとりは、美しいお嬢じようさんでありました。平常へいじよう、女おんなのほうは、子供こどもらとオルガンにあわせて、讚美歌さんびかをうたい、また希望者きぼうしやに英語えいごを教おしえたりしました。そして、青年せいねんのほうは、子供こどもらに、手工しゆこうのけいこをしたり、自由画じゆうがをかかせたりしました。

ある日ひ、この若い男わかおとこの先生せんせいは、子供こどもがならんでテーブルに向むかつている前まえへ、クレオンと紙かみをくばって、

「なんでも見たこと、また思ったことを、自由に画にして、かいてみたまえ。」といいました。

秀吉は、なにをかいたらいいものか、自由という意味が、よくわからなかったのです。いつも学校では、教師が問題をだ出して、それに答えるように教えられていました。線一本でも、まちがってはならぬのでした。だから、自分では熱心にかいたつもりでも、めいめいのものと見くらべて、よい悪いをきめられるので、いつも、ほめられるのは、日ごろ成績がいいとされているものにかぎっていました。秀吉などは、どの科目も、ほめられたことはなかつたのです。

いま、この教会からもらったクレオンは、品質が上と

等^うとみえて、赤^{あか}の色^{いろ}はまったく鮮^{せん}紅^{こう}だつたし、紫^{むらさき}の色^{いろ}も、いつか友^{とも}だちの家^{いえ}で見た^み孔^く雀^{じゃく}の羽^{はね}のよう^{ひか}に光^{ひか}つてゐるし、そして青^{あお}い色^{いろ}は、ステンド^{II}グラスをとおして仰^{あお}ぐ、あの奥^{おく}深^{ぶか}い大^{おお}空^らのよう^だつたので、彼^{かれ}の持^もつてうまれ^た創^{そう}造^{ぞう}力^{りよく}は、なにをかきあらわしていいか、頭^{あたま}の中^{なか}で、出^で口^{ぐち}をしきりとさがしたのです。

彼^{かれ}は、まず、まざまざと目^めにのこつていた孔^く雀^{じゃく}をかきました。それとならべて、彼^{かれ}には、お化^ばけと感^{かん}ずる、ひげのはえた丸^{まる}い顔^{かお}をかきました。しかしそれは、人^{にん}間^{げん}の顔^{かお}ではありません。目^めから火^ひを吹^ふけば、口^{くち}からも、ちよろちよると、へびのように、赤^{あか}い舌^{した}を出^だしていて、頭^{あたま}をかしげていました。

「だんだん、ほんとうの君きみがでて、おもしろくなるね。」と、若わかい先生せんせいは、なにを画えから見取みとったものか、秀吉ひできちを勇気ゆうきづけました。

このとき、とつぜん秀吉ひできちは、

「先生せんせい、神かみさまは人間にんげんをみんな平等びやうどうに愛あいしてくださるんですか。」といつてききました。

「そうですとも。正直しょうじきなもの、また貧まずしいものは、とりわけ深ふかく愛あいしてくださるのです。」と、先生せんせいは、秀吉ひできちを見みながら答こたえて、目めに涙なみだをうかべていました。

やがて、北国ほつこくの村むらや、町まちに、ちらちらと寒さむい日ひは、雪ゆきが降ふるようになりました。教きょう会かいでは、そのころからストーブをたき

はじめました。

ある日、秀吉のかいた自由画は、これまでになかった特異のものです。少年らしい人間が雪中に埋もれて倒れていました。

そのそばには、いつものたこ入道が、ひげのはえた口を開けて、さも勝ちほこるように笑いながら、赤い舌を出している。また目からも一筋の糸のように火を吹いて、少年の死骸を見下ろしている。そして、この化け物には、幾本も手や足があつて、それがへびのように、電信柱や街灯の柱に、まきついて、つめから血がしたたつている。

すると、そのとき、頭の上を孔雀のような美しい羽のある天

女んによが、ぐるぐると輪わをえがくごとく飛とび舞まっていました。あちらの空そらは、真まつ青さおで海うみの色いろをし、また片かたほう方の空そらは真まつ赤かで、日ひが沈しずみかけていました。

若い先わか生せんせいは、この画えにひどく感かん動どうしたようすでした。

「なんという題だいをつけたらいいかね。」と、先せんせい生せいは、秀ひできち吉きちにいいました。

「天てんによ女によとお化ばけです。」と、秀ひできち吉きちは答こたえたのです。

「ああ、それがいい。この画えの意い味みは、どうやらわかるようだ。」と、先せんせい生せいは、いつまでも画えに見み入いっていました。

教きょうかい会かいへあつまる子こども供どもらの画えには、それぞれ特とくしよく色しよくがあり、個こせい性せいがあらわれていたので、教きょうかい会かいでは、それらの作さく品ひんをあ

つめて、一般ぱんにしめす展覧会てんらんかいを催すもよおことになりました。

当日とうじつは、学校がっこうの教師きょうしや、また家庭かていの父兄ふけいたちが、参観さんかん

にやつてきました。ちようど昼ひるごろのことです。参観者さんかんしゃの一人ひとり

が急に卒倒そつとうして、大さわぎとなりました。さつそく医者いしやをよん

で、関係者かんけいしゃたちは介抱かいほうしましたが、診断しんだんの結果けつかは、急性きゅうせい

脳溢血のういつけつということがわかつて、もはや手ての下くだしようがなかつ

たのです。

このとき、場内じょうない係がかりの、自由画じゆうがを受け持つ若い先生せんせいもや

つてきて、先生せんせいは二度どびつくりしました。死人しにんの頭あたまがはげて、

ひげのある丸い顔まるい かおは、秀吉ひできちのいつもかく、お化けばけの顔かおそっくり

だったからでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「キング」

1953（昭和28）年12月

※表題は底本では、「天女《てんによ》とお化《ば》け」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

天女とお化け

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>